風俗
永代談語
八十九
へ13
2132
67

67
へ18号
2132
67

子冬 辰 子冬 丑冬 寅 辰

本所 中之郷竹町 古本 貸本 丁屋弥三郎

62

饗庭文庫

辰巳風俗 永代談語序

書肆来て予が序或乞外題ハ永代談語と題

とを婦嗚呼奇特なる南葉が孫ぞ夫れ

子といへども子たる道を忘れ金銭を貪る者の語元り

ゆゑ彼岸まゐれ六阿弥陀仏ハ舟宿

武なとまゐる乃物未だ孝んでまゐとあ孫子

法ぞ孫未来ぞ郷戒粉みぐさ

和歌浦潟世間子は海ぐに掛る手
管は魂膽を間夫を搖出す義理ぶくめ
おゝ儀者子は江ぬさ弐舞よる者子乃
喰気とそほんの紋勢だの内所子五色
者子の色舞はゆめ者子はゆるもより
松むすの者子者色即是空鉢は原の
錦国子もさぞ土の者子に等しく

都者子は数のうも内心如夜叉子は元の
虚を春抜者子めを誠なる月見の者子
毎日になると言がうとゝ辰巳は風俗通
言ゆうて者子の松よびなき東者子乃
心いき代談語は些小冊ざきく深判こと南云

作者かくのとく

栅堤ノ市隠為

越前三國郭遊女

筆者 小泉重泉

辰巳風俗 永代談語

序幕 過去の縁しるべ

鉛鶴橋九殿

正本

○發端

板子一枚下は地獄と云ふ仏法は三世因縁の道理を説とい[illegible]梵網經の孝順父母雜經の孝養父母奉事師長仁王經の八親ふ和天神不祀親菩薩戒の孝順父母孝の經の孝行興仁智徳礼讓等是迄釈迦如来の御因果教無[illegible]と本とし[illegible]今日の世[illegible]ぐ[illegible]ん[illegible]八七月

十六日大地ごくの苦をあらはす大王巖に腰かけりあへり阿鼻
羅刹の嘆の鉄杖をとりてさいなむ虎狼犀象屠殺の爪牙
をとぎすて鉄地要獄罪人の屠をさいなむの猛火熾くして
天をこがし数万の獄卒罪人をうきたれば罪の侵重に業の
秤浄玻璃のかがみにかけ祝服奪の衣無をとりけれ毛孔
いづくとなくあせをながして苦をなめ舌の毒
吐喚獄羅鬼畜生大焦熱血の池に蓮級の山すべく
一百三十六ちこくみてくそれくの罪科に堪さる肉の皿目
大口面皮赤奥遠嗚出乃ごくそうども大公の苦をも九

てごりくとゆでわがりくをうんてあれべお深久松お物久柔
らめおセ吾三お物ヌ三おそん長ちの お長清十ら物川患ら糸
小夜次三小いるまま三お花中七おお面人伯三おつまハらこおさん
義三おちよまこをちごめてその糸数方のうへ乳罪人をうにヤ
罪れべ閻王伯出さうへ無法の戒名のの西三夫ども怪お
罪れもてまう風のんてそ死しうるのの獄羅乃と定めて
みうるのめごう戦切或いう死対乃さごひうあ戦なごうう
人もこ流さび物ど死く折ま申せびうう人のの乃罪のの乃ふ乃する
なれべすうあん極楽へ生ちうとへど流らうあはようあ

死するびやうゝゝぬたりをつゝまず編をむすびの神さんがうゝめしひ
なゞくこゝをつくゝそのうへ京住生駐りを世祿へゝびる二
世乃緣をむすんゞ死ゝるものどもなれば生乃通り手婦
二把束ゝくゝゞ永沉ゝ墓ゝ今日遊廓世
界のちゝゝて三盃業分宮參のた旅候鬼酒切のゝ仏乃ようゝ
ゝの頃の大報を行りゝる遊廓の義へといと線香の至天
かくらぬいをぎ立海ゝくのことばゆゝめつりるゞゝ
ゝ死ゝるゝ羅波のゝとしいりゝとりその身の意ゝ男と為ゝ
死ゝるゝもゝゝゞれ右のゝゝゝと一ッ今ゝ為ゝるゝゝもされ

ゞ行年鴉ゝ着ゝゞゝくゝゝゝ剛生ゞの限ゝめゝ出ゝるゝまゞ
赤鬼ゝ黒鬼ゝゞいゝゝゝゝ一ゝ第鬼ゝ第ゝゝ第鬼かゝ
ゝまつゝくゝ引ゝゝまゝ板ゝのゝゝく血ゝゝゝりゝゝ紙め
ゝゝゝ板ゝゝゝ陸ゞゝゝゝゝ

東西の藤菊虎が枝西方よりの家の接伴婦女あまたこゝろよくん
節義のものの性質を以て若衆に対わらはしまべ接待のくさ〳〵
若男の中に生れくま婦の名んあうべ〳〵とく閨をてぐ〳〵
大ざつ書を初めて記くしたるべ三世相をうんうべ寝ぜる猫乃
ちーの生れ川井の行性男に帳うの浴性行性浴と相性い
よきさをうそ行よすべめりどこ思ふく引だとく前世の逢
縁ようりて夫婦合若男性をべ〳〵一代のうの本る坪皆
翻八幡をうんぐをべ〳〵とくしよ出いとあをうあり閨
五番目に出る人見出秋日の出酒をさゝめ〳〵出るの出も白

くなりまぐくに酔せられれべ出おいそのかぐうるへせいひつ
いろよ成視服いひりく〳〵だちやねの酔ふわ店ざしの
すぐぎよ生男いふたくうのポトあちく〳〵焔王性蓋ゆく入りま
かくそく〳〵閨浅桜と出地ぐくの浅つを舐くむりふうん
ま〳〵縁ぐ〳〵びくませ姫乃帯をのくういうる伝士ゆくへ六
さんぐう河ぐれべ〳〵くさんぐうとうあうまく〳〵ねそのさん
へ毎ぐりもるいうとくへ出ぐうくりあづひくねそのへねるの
とふが毎まくへくとどがあるよいのちをすそくんるすんうさを
抱れぐ一云いひくとんぐなぐかつさと河よ伝りゆく

世せてこゝひ入ゝくいさゝふものなれべさりつて〳〵稲〳〵世その
さんらつゝくゝひ物こさんぐみくぐらとさらぐやうみ
ものとぐりくゝあげゝくゝひもうゝひきれざきやまでゆア
稲〳〵ゝ実物そのも秋月さ式丁稲い株番ぎこていまを稲〳〵る
九ゝ人二ゝ月月月棚よ数〳〵稲る蓮ゆゆも質米ゝゆゝうゝ
嵐尾州乃ゝもものめ稲〳〵中ぐだんゝゝの株数とかつて元
稲乃ゝと物仏乃宗十ゝらや路考ゝんて〳〵のゝゆゝまいゝゝ稲〳〵
引ぐりさひ高ほ中人のゝゝを高いゝりんぐゝゝ物そのと高きゝり
りて地ぐゝとゝもゆゝとゝらゝゝつて測河〳〵月とあげて

いきゝくゝゝゝまゝゝゝこゝひゝゝゝゝいゝゝゝゝ

海老雑波のこうりゝん弁乃時つまとつてるま合せて死くるます我くも生てかぞひい海さだとり居をゑんまの性よりぞあくとふくさを出つまくつまくをくくり合せいざさくだくて同吉ふらくひあをいつまてぐいまれ松

ト三遠川（ぞんぶり）○ヲギヤアく

幸平幕三月廿日一面のみこほく上の方に紙細格子此方ひちく国源を見せ帆ちらを立つけあくよ河せがきの幸婦婆と行と立紙の幔のぬこあり一体うあくら野洲の夜明のりーき波の物とふく幕行く

ト

橋姫よりちくこうそくこうそくこれよ表情ともそくそくそく

方にてぶ〻酒の口の横ぐ口をよめのよく〻ときこゝまの酒(さけ)大
雜(きす)とうれめいりやせう汐(しほ)八合〻〻さ〻わかをりの乃乃屋〻とこれ
やを一(悦)いりとの川へ猴(みさご)ざの一(万)きのふも乳(ちち)丸が二乃屋のザ志
やうあ〻くせどきをあぶ(炙)て又出(だ)でんのしるとのせこ申〻お店の
〻と笑(えら)ぶやの人ぐ〻あ(あ)やの〻はわ(わ)ぶ(ぶ)なぐ〻そ(そ)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)〻そ
ごせへやとよ一(悦)どこ〻の川(かわ)〻も私(わ)ぶ(ぶ)ちを留(とめ)ちの町
ちや町のこ〻〻一(万)ふりごせへ(せへ)せん〻〻さ〻〻で夏のうちやア
泊(とま)りの客ひ〻〻と藤川へおでいひ(ひ)き一(悦)なるわど七へし
沸(さか)〻〻て煮(に)られよ(よ)ぶ〻〻猴(みさご)ぶ(ぶ)ぶ(ぶ)〻〻ぶ(ぶ)〻〻〻

祝いおさ一世若えたやのこん亭と義亭の芽わどこ大一世よいくの
へ祝夏の若ろの名れわこどうこと乃るゆ祝ゆ一方賀
世乃若えたやこ亭ゆ乃ゆ乃ゆ乃

乘加ごと　大なる箱となる前の物
抱りぢやしてひろきを大まつしーよのつ切ゑりうちょうを
らてぐ親を抱あーひなせ下　トろさめくゑまるぎ手
ゆうゑあいたのんざを一けさへ抱さ中ーゑ湯ふこと
ぐせうがを書れ毎ぢの朔第といふ和も面んざゑーやア
こぜへ中をめへ一かゑ月をたてさ朔月ーさへごうもいへ船中
浪上二生之歌會是同ゐ月れへ月ゆ毎ゆゑんア
ゑへたゑ抱おのゑいーふーしめのせをとをきゑとへ万ゑうやアが
抱ま二をよびこうつゑ文アゑと抱ばよつとめゑごがもう今ア湯へ
上ーが廊をあげゑきくゑ河さらよそんちこゑ匠ゑゑ

湯でゑーをきゑ抱ーまもせばりゑ出ゑ考へゑねをのどくも
あーふまをゑをゑかゑ上ゑこうぐ家ゑ国ゑゑ時ゑへ論面ゑゑ
十ゑーあゑ抱ゑゑあ抱ゑかゑあーひ声でひをきをゑゑふゑをと水を
ゑぐゑつゑふゑーぐを抱ぐゑかゑのゑせちぐゑーひ車ををゑゑと
ゑへゑゑ蔵ゑゑぐゑ上ゑなれが出ーて中ゑ乳へゑゑゑゑふゑ
抱ゑゑめゑぐ二月ゑ抱ゑ中ーゑ湯ゑう一小へんゑ抱ゑあ
抱へのゑをを初よぐゑりゑぐゑーゑかんぐゑんてゑぐゑゑゑねゑまゑ川
今ゑ中へ人一産ぐゑあゑ三ぐこんめゑあゑんぐゑい七ゑ張ゑゑ
ーゑめぐゑゑゑゑぐゑま中ゑ魚ゑんゑなゑゑて抱れへ二へゑゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のことが極ゝ出てゞござる。多分一生の命でゝ
あるうちと三年もあんでこちんこうさ一方まゝ生きるこの
命で稼ぎあつめてこつへで極せちこんぐわるかからとちち
が生きせくけつり出ゝ出ゝ出ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

義経小舟にのりて弁慶一人紙子の船の三枚あ一人安宅の関ト堅固にきこえ まつこの道より難儀して西の法師まんく者共
兼好も今見る我涙もよ是ぞ大悟 三谷の暁ものゝ一人
さもぞ人の通に通れ一極楽よりんとせらまし一もさ人の涙
なつしん川ぐちの川く黒るのゝ宮をとつく川果場と法華
天の原ゆくさん郷ゆくさん一人ト切すてる一倍一あつぱまでさく一身を川井の
万ぐろ人一倍その逆縁にひきみどりを育ひさせう一人のあ
くが一倍一枚でも極る一万デモそのおぞやのとろぞへ一倍ハテあるや 幕
ぐりのかくもその声さトちよんひやし 幕

中幕

現世の

着花屋敷

本舞台三間の万正面黒幕ト空の方真せく石の石垣
をすぐる見せ門を堅すぐく宅ぐ囲八まん名居前のかり
家に武蔵清水寺観音ろく法桜にぐさりくる神る
のゆ綱を引ひかるに其方にとし抜ぐろまのこうら
ものけるの奥づくをひくつるひ元大塚白十の形ろく
見ぐろうまひてある幕の間ゆりくやのかぐ武人黒ぐ幕
一ぐろ人一リ石井寺のかぐりるいさこうさるむふぐくゆ
いとぐつくりふあーおまあ女あろ人ぐあそをまぐうあ一仏の
ゆつぐあ人一一雙のあゆふ人の桜寺道の表唐万客常ろの

かゝるも月見に園を明うゝて　とも弥乃伊まつりすると
ぬ　ゆあの片月見哀の中裏和哥町のとしといつまでらあ
ん　しあらあさんまつく　ゆくまあさん　せいた　一めんどうあつ
一度　ゆあぬ　ト　まつくかうるまうつくるそたけしきを見りてらあくをト空
あいさうとろひ入　一　ト　つくひ敷をもり酒の位まとあせる弥るのうのへりり
一ツ清のすきさべ立ちわ　アノ　さびんの丸ろくひぶりく酒の猴とる
例も弥の山ぞくそうじや　ト　ト空つのこたらと
ト　本舞台正面廊下に上の方に二階仏り人通亭盆体をこ
ゆ庭板塀並びぶくをとり付尾花大分受てらる曲どとつる
ら園門お和哥町着花なのかゝるひしの群ゆ表群ゆて
いさんざうとそ幕明くト　表中の歳向より一切あの仕切りゆてこ

一　ゆあ出あ立　一　弘前ゆ人　一　河原ゆ人　一　ゆて　ゆて　帆
ゆのよ　男よ　一　ゆまとあ出　一　八ゆあとさのむぜ
一　ゆ　ゆあ　ゆて　一　撲空袋の三物とそして車
着が出ゆよゆあらさんへ　ゆて　ゆへ　ゆよ　ゆひすやの方のお和織
を出ゆあくさんよゆあゆが出来ゆとそうゆせいた武蔵
さんへ山へいきるとつくだうしゆのさのう
ト　ゆうゆくへのけいせへの出乃唄よゆのうゆ花ゆうの武士へ物いろの実露
ゆあ悦の目の傘でぶくとゆとゆうゆこうらくゆそゆくゆきゆ
ようらゆだえゆしさーとの振ゆあてんどんよゆひ松ゆ表ゆの七ゆの
中面白ゆうゆく三浦の八ルシヤ鐵の帯右のゆきゆつゆきゆうゆ白ゆう
の下帯ゆうゆてゆきゆすゆ三ゆとゆひ　ゆうゆどゆの表のゆお弥ゆしゆどゆる
ゆそゆだゆるゆとゆうゆうゆ大ゆくゆどゆをゆそゆくゆきゆそゆこゆでゆてゆる死新ゆ

まんのまつ山金の柄を[illegible]
[illegible]
しやおつな金をもつ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 武蔵さん 一味 [illegible]

ト [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

ト [illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　よいこんぶさんふうのうの家拵之

ト　ろくぶんまらすこのり家図の二ろの筷さーきのかくと一体此家拵ろ
どみ家やーそさびーき体家に居さくゆーきさ六ろもしとりもに花のもと
かしあいねんどのさや七さの油にめんう田のあわせちのくめどんすの茶と
まくふてそまり麻のゆたあくとのけわ稲てゆろゆとひどるまてえにもをゆ
しを梅しかはきさくくをらあゆくゆくゆむさふるうかて三味せんあふふい
りうねどうたどはるね氣ふるりうにひこるしてふをゆうるてうーふり

一つくるくらいそのぐ拵せべョウ　ちわげそとうで湯が拵せぬスキヤ

ニヲヤ　チヤン　チヤンく　一　梅ト　をつどうり寺とけをとらさんよお
きうせきさふとふつるうまで澤あさう稲いうりうやめ
やせうト　ろあれうまふみ　ゆさこうけて寺ふ　一　梅ーさん具わいとりして　一　去梅ちや
ろさ　一　強るり拵めくでなんりあ麻ぐきれ稲いを　一　梅　又あん

ろ拵まと拵つなろろよモシ　去年の月さん公家おの優拵て
のこ明ーまーるつける拵さきとん一ツトかまてんあさん
なる動屋よるる時も関よおくも知くるる足一まひどこ
まきうり拵ぐてうくよいうトいあれうひいうゆうう
さ家やたたてを麻の関
まひ納くこうり出ことつる　お汁さん何ごとそのけをとんぐうト
なり焼せうくきこつる
こうこ（ひし）手るるぐ拵ゆーふゆうきさうりのゆうくをりのくちちとあ法
ふりたてりうこうさりんて稲ておるまくこ毛ちぐきう人させるれうこ門の方
の声　一　拵ふうさんよーううそぐよセつよけくうというを家子
けいつくうあーご稲のあふウ　一　おをふさん　一なんぐラヤ
ふさん面ーぐ拵ト　去ひおぐーをりまてうりふつくだうとる。
井をし面麻ーるそのくやうんのう

[illegible]

一 [illegible]

人のるよりちがうたちが出るのハ二三度のこんてさうゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もうのこゑさんるよ　一そんるゝよさゝの枝　一いくいな　一どよ
とも後へとて　つぼどもけもすることら毛虫　一ねこ　一ねこ　一ねサ
雪ゝかゝ　雨ゝけつるとすぐにこちの内へ初金のお出さのけや
毎ゝ　一ゝ　一みんごよ　一ゝ　一ゝ　一ゝ　一ゝ　一ゝ　一ゝ
ゝ　一ゝ　一ゝ　一ゝ

えんてうふさぶくすごくかんつめたうちやアそんさ
つゝひよ一とこらもいつそはちはをたゝれゝ出るしやに
でもおそいたゝぶたゝ稼へいつてはいつれめい
よト はあんにてゆんゝゝゝ中ゝゝゝ六ゝゝゝゝ中も 一てあゝが他ゝ出
ちやアたきぶあゝ大神宮のおもてうひとをすてゝゆうみのさト
ひいき一とヨヤきゝいたゝあれさト みのこゝろ 一いゝたゝまてのゝう
をして一とナニ氣ざのんざらる一はゝモシ おさんこのゝいゝそさき
いぐゝあるからのゝこゝへせてあんゝのゝゝ ト いひるぐゝゝ中ゝゝゝ
あそうすゝゝゝゝゝとゝとしへおんごうとゝゝゝゝゝ
てびやゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝ

かゝ垂てゆりそへゆもいされぬ時宣(ドさ)のとう毋すゝ
さらふ一十二そういふるまゝ三新い日ゝ
が古りゆゝしゝよゐきゝゆゝあつて又見かんぢやうにはよせ城で
いつもそびと賞(けう)さをりで梅沢一めいさ三おめゝもげい
しゝや賞(けく)でらいも大まうよ捷びつけゆつさゝ今の乳
ぎやゝ毋ゝうゝゆよトわゆゝこゝゆり(絶沢ゝこゝゆ)ゝ(きさ)ゝゆよゝ叶ゝゆねゝを
うきゝゆゝこゝゆよゝゝゆきゝゝゆめゝさゝゆゝゆ米一(六カ)ゝ独ゆ伝が
うゝをゝつゝゆゝゆゝべトうゝらゝゆゝゝ(にをとおさゝゝ)一(と)ゝゝゝゝまゝつゝゝきゝ行ゝゝゝ
一(絶)ゝゝゝれゝさゝゝをうゝゝゝをゝゝゝゝ

あれくるしくて因れば二階でこんるるいてくるこのごろの
だんこうかもかんを付るゆうすごろうてしく仕ふる
ろくろ 家さ一ごうぞやれうのはたことを世のこうすを
つくきりはもものごとくらいつもめの者くを世で
とろくろくねこが今ちんばあるが一ホンニ扱めへかすで
めの頃いつそ乳がつまりこよ一てあくもおまいこと
うつさ一とりてしがやうるるとめを始のすりて喜び
すごしをさせやさ一よしこの扱れは出さめ不儀
金をさせさ一ものを溺をたとてとうくうんるが

ふうもひるるうちをりうちをりうるさくくんるうさうるうるうる
一りるうれと夫をうつくこの行んが取りるものり一六家の
ろくろ多医めとふるる一ごうせのかやせこのうれ木場あるうの
橋のやうご一見ごうるのこうんるるいうこれだれりて
▲燈闇シテ數行虞子ガ涙せ見の一とさん出芸花盛
くくとくくんが生ているるる一今いくよ一かりてかう
あげくもあんまりかべとみのたくひごさやくいきる
ト 扱きてさのぜん出がくしのせくしに行くくーてあいくちろけ一とさん
ちゆうんの沼と出て茶をそうるとにだくくとひる世が一ちさん
今者見せ切くくる宮くーやうるはーかくるるるてあくる

[illegible]ぐ母あ[illegible]の[illegible]ゑ[illegible]を[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

はとさまの稽古いたしも稽古でさをとる役目が
立つうまでもおさまりがたく
あるに稽古のうまづ酒のこの男とうまや堂義を
せうばいやをなをさせ立てるよう氣をつきて
勤もさげく庶とつるハ一ト切とむひをうまくる
ぐこぶうをうん通しるとれうかどふうこぐを
ものにあるとあちは稽古そうをあるよう分ち
ぐ嬢分のうんをしやぐこハ抱ぐうるを大をるハいを
ア丁ぐが氣よハぐぐ外のうでもうびるせへと
まぐをいへださげてもすむよハ慢の蕩蕩ぐ
あるへしまちをもを稽ぐあるこのんまりへどぐうふ
ちをあれぐうをうく抱ぐあ鼻すぐうを大神を
あ方の眼をハまんと去日をあぐぐうをうを鼻
のををまうぐをうをれぐはうをを桟敷をみ
毎ろうがうちちをらもを抜まべ抱を毎
をを陽ろうラをんまうをでもうをうへト抱をぐへと
一ト(書)さんぐ明るをとうをハうをうちもをぐをうを
いを毎をぐをいうをれるうをでぐを一(書)をぐをいうをを

本堂ごむひの祈りよさろいかんどうこんめまでが向こ
あ〜ぬこ〜あ向と溜るもあや方大すとろ〜ろ
麻すも〜乃ろも先のさん迄を材るがめろりごびび
くあうごうろ菓でく菓やうあ良るの指ぜうもつり
ろ〜ひと〜山のこのづいで材ぞうあろしも出ある名
あ中ごがあくて揚祈へあ〜工り番場おろくの菓の
中うよまごづと汐のまんあ中で上るをいんて祈す
菓ろさあ〜あとこーらろ出ざかごをいひ材る
火縄箱よ初やめ〜ざうりが行ろもんりてん

ことひとせんごうもなこかろのはぎひとあもて一ついぞぬく
やろうろうろくありうそある一ついぞぬく
一あんごごろ〜あられござんごもとうろ祈お
めくさんがきあさろときあうにその貝ふをあるご
のをんごがいての菓ごあ中ごあうきあとろふ出中
あのおろ紙ゲめいりあ〜この姫のこんあくのく
いろごびにで中〜ろすれ祈一中ろごがびれ
よめ〜ぬ小役おの二階ふあるゲ大さうしらひろふ
ろろ中〜ののごろうぷひ大〜の〜ごんゲんげあころ
いそご〜くてそまろよなるあろさろひ菓あく

洞窟をけ〳〵るへ　ト　夢〳〵もまさむ　一里のそんで　一ぞいの沢うまう〳〵行〳〵
しさんあるもまん行〳〵　一　武　ちうけもうぶちやもう〳〵行〳〵
一里の切りたつ〳〵とく〳〵行もあいさんいうまーひぶおでん
ぞう〳〵ぶくんだくのしぶぶーっこでかつてくるもの
つきぞく〳〵さんいりんで宮〳〵一里のめぐうう宮が
出ぞうこいあをんぞが内めく〳〵まひあすいうちも
かへ〳〵むづーうーとあつうう行る氣であるさ
らう　一　ぜあ　おあくさんもあろうるうをいひかのさる行る
ぶれば行もすいるト　さすが一里のうるすりあるうぶ　武　一二階中
の者へちよとでうりあうう　おうびがあるさそあほ
しうろあるうあんとうう〳〵いられる海でも行〳〵　三社
の滝とあ〳〵ぐるあるあいぜん明まがちうあで
むへよまそものりあさだうあ出とうう〳〵ハモウこれ
ぎる里出ぞ　まつて廊〳〵うけ〳〵れく〳〵ぐんあり
ものやそばよあ〳〵行る時二家といられもせたその
時間でうりたちう〳〵ぐうう切の到さげいるけるる
芝神れで行〳〵ぶ勇あ通ぞうけそうの大手ぐいられ
るものう海いいうあぐ金がいうそいうらーひがこを

出く廉稽和哥所昭るの間ゆゑ呈もぬく山葉あり
とゆふうたてけとりくいこうぐう夜ぐの時こしてもよ
ごもがうのてるは辻堂ふまごゆ中のよ六級でも移く
相右のふせうぐこんるも都くサア母ねくよよけの
ちりは見うく出るうくトかれいさのぜんまりへいきでいひとけの種を
くはづよ一夜寄さふまあふ仏のこんうこけうう絵いふ
ちかが坪ぐちうくとうくあんまりあくうとうとけ
ひくあさんる一ゴレ氣をよくくそあれは者辛らく
うぬが物やいるんぐさ大うこ紙くどとうひぐらふ

弟ひくの見うくの物沢口うう物ド板ものを出
ものく板ひるも氣がつうて大きおごくくう物を
七くの陸のるるまでやアゆゆが買物こんくべ出う
喰てもかくやアゆく氣よさうるけあるめへトまうを
そくびぐま高くあとうきあるき一高典あんぐいくてうこうんて
立ちりすとーあ高くあきつさ
あるへひかトすとーうんさのうひへ高あうくりへうげまるどゆく
ものいるーこれうるーもういはそんしりるく
成こうもこれとこれりどまでかるぐ高ぐくしゆく
今ここ切るるも実神くおとあれきこみて一うとあくめく
つくうんせう部へうくくしひが物をうくひ物ぐうど
そ物ぐんづくるくまけくまくうぐこうちの

あるまりの中間〜いつつ
でつる志〜無れつ志手ひと
かめいちいせい時へまでも行でも耳くさが長の写文を迄て
そざろくさらつよむ四三分ふのろそうくいのえんびります
そどふがあるざ乳ざでこめとあつくさせこ爪甲のくー
貫たこのがりう行ぐ金のめうぐを二通りつすこ行ぐ
きれいとつそのまで料理まうこ女子、蓋を育て義も
中り長そど第ちと志ってそ中ぐ正月いみりて宜
人物ふ〜牧づひの果考ちとれもよ三稲文

井ひととつが行〜志んこ
九〜ふでぐ根芋め枝豆
ろとこ一一
多れべげいーもとうぐい
やふぐ四う志行いうけふこ
ち毎〜抜きねつて接ねナ一
抜ぐうち志ねつ中う
ちが抜きぐんぐぐぜこを一
めつやとこ

あとへもどり
くむごん一ぎ
ふせうをあがり
かくさ一ぎ
ひるまはいねいなぜそんのふねのきけ
だりいくうせすく一ぎ
いろくたまふのご一そうい
ちぶいふのとも
くるまのまうよたくをうて
いくさ付家園のあくぬ

買切て祝りしてあるのごとくむづかしいゆとうし後
さうとうせんごでごと実ふてとてもそーぐ立てこれた
十年ちよつといろくこれでいろ
さのさうてふまそいーぶんごせんやうが関ふのうりハ
ちぜくとてあるこぶいて出るさ日ゆ安へ今のさるおめく
で祝へうくのもとういてやせんいつそこうてまへ
ゆせ下一ぎ
なさん祝へ関へ百年でもけのさ後へ一ぎ
ぶぶ朝ゆとーをーをとて上

一そんなことをしたら男のせうさんきゝのこゝろ
よべとゆうて後と母さんとあぜいくなせて
さてとしたとそうそんなことやアのいやせ
んなることこゝアせいせんトゑどごんで一よせ
金入ごんを母さをとるハ一ごれがその今を嘆て
いうさく一ゆごふとゆうてのさ家母ゝふ世話ふ
する男人ごさてゐゆう一ゆんふさこゐやたこの
人さト九のうでをこれまこれてはるときのトに
ゐて目のまゝ石さ一ゆるときのトに
ゐて男人をゝゐつとやきこしがたゝと
氣をとるくゝ一ゆんゆうとゝゆゝ義ふしてと

その上へ人情をそなえ男の戒めをゆり生れたゝ
ごゝふごゝくゝらゆりのご一ゆさふさもいと後のさ
一ゐくこゝもトふこゝもはゝてゆ一ゆさびしひちゆと
ゐごさこゝゐてゝんゆうトゝゐそゝたゝこ血ごゐとかゝゆさ
ゐてきこゝすをごごんのゐりものをごゝ
ごひへゐごゝくゐそゐごゝゐゐゐゐゐ
一すゝ武さへさんきのゝ地めゝのきゐゐ陽でゐゐちゆア
病氣でゐゆ一ごゐまごこゝ年とゝゝ年ごゝゝゐ死ニ
ドやゆうこゝやせんゝゝこれをゝふんせるんゝいさごゝゐゐ
ゐゝゝねゝゐゐあゝゝゝあんゐりごゝせゝゐゝんゐ

あさうの夫は極へ一千病弟も不ひせりかぐ我
男子もせんどはるれのあるうちとくんあく
いとぐふさだ物りはるすとやのすもさんろ
とへどの夫すもすである一どうはいかとこ毎
いぞトあるこどようとしこのこ月よあをもけよ極てたまこり光の
白ちくめんのト物び光どけうるくうくしきむとをひろげ
ことト帯の志めきこへまぞこんけしゆうをーこるりううきのもく
るけてうすすうりのゆくへるちうつうろのいとうるるぐすどうひうるる
極ぐこそも是ゲ千二五で一もひがいそくさもつくくる金と
番うこるるうゆふ武こ自ゲ千ちり一もひがいそくさもつくくる金と
一武ウゆうるーひトいつくさつめくはでどトゆ小一ふふ
一武ウゆうるーひトいつくさつめくはでどトゆ小一ふふ
一ろんふ 作業歌三百 怜ムへこ嬌香嫩蕊狂風暴雨二

飄蕩セラレ遊蜂浪蝶一も豈玉ヲ惰こ
香ヲ愛スルヲ識ンヤ一武ウ 回 雲雨の梦已ニ
盡ヌ鳴呼惜ムベシく一武ウ
紅宿こいつてうとせ とてうづくよ卜
もあるこれいるるかてしちくかけうどの上りけふ八方をうり小月ふ
のるきこれりつうるある烏悪沙鹿明王の炎と元ゲうるるうろうつ
てあるうトこせん絵お義でまうてて庶でりんうさ金をくて柳の図
いれるゆあるひてうおがむけうち二うのやそけいしゆ 祖々さ
一もこれをとうちうぶ図のぐんるさんへうでもゆて
おくんあこしてての図へもよろうくく 回 さうぐくふ
さくむくされのトうテウうくトンくれをとうあてもしそろ
座考のびゆ系さのぶ

帯をねのまへうけてまへの方う裏あ
ゆのものびがくーとびりる〳〵ふたり
一ちょ　ちょさんう　とざきうこ三ふ〳〵
こと　いろ〳〵　うま　ばいびしと　ゆきさゆき

テンテテテテ〳〵〳〵
さとれ三重　まく

切狂言の段

第三幕丁数減
いとひ見とうり筋
ゆ安さ事〳〵中上ま

八まんの道中ふ三ゆきまゆ　ちゆ町のぢ丸くらは目の
ゆめをゆずるその隣つき坊へ泊そ世を川作の方
ゲ乃ん〳〵その身ひうまま　ゆへいゆまこのうのさるゆ男を
ろうこう　見沢智ありーゆべいんもおきゆまにうひゲうれ

万ゲ長ぶんのうまひーといふ母りうゲうれ
どの茶屋へ行ても万さんくうくゆ立ーまさうゆ
ゲとし俄ろうちゲうを結びとうけーヌるを
うこゆまとそのまいう河の中へそて母きーゆ
母ゆまゆろひあゲまーうの母ゆまゆなく
そゲそこのまーゲあのゲ兄女兄男と母ひうち
りうゲさそゲどこうらくれうひとく女のゆへ私ゆ所
ゆゆうりのゆゲもとゆの男のゆへ人殺せーわゲの
ゲうらくことのとゆりーうや殺ゆへ〳〵の切茶とろ

のうぐれ初じ宮こぬるのうこ
ぶこうゝゆひぐれ大ぐ
りうぐ一対 世界を観じてうり 沫知 浮水定
須乗顔主船 捨舟
ときのをくりの 毎ぐ
あぐ
毎のづゝ 朝ふ一双眼をん
ゝ堂をこんりとり 朝

たゝく世界の幻相を観ずるふぶふ風おのうりび
扉稿ゝこ あぐ せゝうをつゝる大概の蕊花もゆき
場ゝ毋ゝゝ村ゝおゝ ゝ蕊ひゝるゝ家ゝ迫
ゝう 時 ゝ男女の情死おり ゝ死夜ゝ
出ゝゝ ゝ法あり ゝ悟舟和尚ぐゝのゝあ
法を俱りて日情人期 後世 銜刀 為 羽 鑿 終
晒 路 旁 時 遊 亀 孤 落 渕 ゝ ゝ仏おゝ
経 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝと九月晦日 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

しきたりなどいそがせくくてうの武士にはいれて
てうり屋敷よりなどめとりもとくしわざのすへ
なのれば意しさ物をせ洲浦の戸の帰りかごふ由う
まくとりのぶせ〜ゞいとあをあをりて一人碎礫乃
ゝくさまざれ傷ゝのうちれ門前の濱よ立ー流
濱頂のひーゆをとゝ丸ゝをのこ息とつぎねりふ
搖ちうしく布乃中まうう二ツのゝ人獄いぐくんう
く色まざめうう男ゝ安あ中れさぐさあうれ
出まゝ武ゝあうとゝまりぐんうゝとゝりしき

かぐりゆゆうく稀んぐつ中せびさもいのれ敗
声ーてゆ武ゝくさん今ゝあむけの緑ゆうゝう
なひぶぐんをするゝ人ゆゆ中ゝいさんと二世の
ゝんいむゝとひゆーゝぐ来ゝゝ無ゝゝのさんといよ
抱ゝゝさんがゝゆ世ゝゆくゝゆゆゝゝゝゝゝゝ
をつゝ出ーゝひゝゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝれゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
抱ゆゝくさんゝかゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝそゝゝむ涙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右漫戯書以雑劇為熊故有妓有滝覧
者以狂言綺語可入讃佛轉法輪之真
道則幸甚
予以微意續之因呆癡報可為正本者也

振鷺亭主人　識

先今日話是切